

自然保護常任委員研修会

平成 26 年 6 月 14 日～15 日の 2 日間、御岳山(東京都青梅市)にて自然保護常任委員研修会を開催し、坂口三郎顧問をはじめ 24 名(常任委員及び関東地区山岳連盟自然保護委員を含む)が参加した。

昨年 11 月に仙台で開催された環境省の主催で開かれた第一回アジア国立公園会議で『自然の聖地』と保護地域の討議がされ、聖地における精神的・文化的作用が果たした生物多様性への役割が着目され、「地域の文化やその精神性」と結びつけた「新しい自然保護」のあり方への検討が示唆された。このこともあって、山岳信仰の事情を聴取することを目的に御岳山をベースに二日間の研修を行った。

第一日目目に、御岳ビジターセンター職員の柄澤洋城氏から「御岳よもやま話し」と題した講話と、御岳神社主幹宮司の片柳光雄氏から「山岳信仰」と題した講話を聴講した。

第二日目は神社所有地となる七代の滝～ロックガーデン～綾広の滝とのコースで植生を巡検した。

柄澤洋城氏講演要旨

御岳山は秩父多摩甲斐国立公園の東端にあつて、年間 8 万 3 千人が訪れる。海拔が約 850m 付近の限られた土地に 39 世帯で 150 人ほどが暮らし、武蔵御岳神社と 27 軒の宿坊を中心に御師集落を形成している。関東一円から多くの崇敬者を集め、江戸末期から現在まで続いてきた。山の上の孤立していることから、つい最近まで、水や交通などの生活基盤が厳しい状態であった。そのことが逆に、きちっとした社会規範と強い絆で結ばれた共同体社会として独自の文化を醸成した集落となっている。

御岳の代表花はレンゲショウマで、全てが自生したもの。下刈りなど少し手をかけながら増やしてきた。最近ではシカの侵入が見られ、レンゲショウマへの影響が心配されている。動物ではムササビが、かなりの頭数が生息している。必ず見ることができるので、ビジターセンターでも観察会がしばしば企画されている。「ブッポーソー」と啼くコノハズクの声もここ数年間に聞こえなくなった。自然の変化が影響か。巨木も多く、300 年を越える樹齢の木々。一帯は神社の境内林で、殆んど自然のまま、極相林の相を呈している。一部の払下げ地では人工造林が進められてはいる。

片柳光雄氏講演要旨

武蔵御嶽神社は単立宗教法人で、神社本庁に属さず、独自に運営されている。ふつうの神社では宮司は一人だが、ここでは 27 軒ある宿坊の御師と呼ばれる主は全てが宮司。御師の家では継承者の子が宮司の親と必ず同居して職を世襲で伝承するしきたり。それぞれの宮司がそれぞれ自分の神社だと思つて、崇敬者が 40 万人と対応している。山岳信仰の以前は民俗信仰とし、山の頂上に宿る神を信仰しはじめ、修験道に取り込まれ、修験者の中から祈祷を生業とするものが現れ、そういう人たちが崇敬者や講社に宿を提供する事によって御師集落が発達してきた。

現在、本殿の社は真東、つまり江戸城を向いているが、これは江戸時時代に徳川家康公の命で改築されたもので、元は鎌倉の方角を向いていたと言われている。それぞれの時代の権力者から信奉も集めていた。鎌倉武士の畠山重忠が奉納したという大鎧が国宝として神社に所蔵されている。

武蔵御嶽神社のご祭神は楯真智命と言つて、学問や占いの神様で、このほか 23 の末社があり、交通安全とか安産などの社もある。これらを 27 名の宮司で運営している。こちらの神社では、年末には崇敬者のお宅へお札を配って回り、その返礼として崇敬者は翌春に参宮ことが習慣となつて、相互関係が保たれている。

所感

武蔵御嶽神社本殿の一番奥に大口真神社があつて伝説の白狼「お犬様」を祀っている。諸災除けの神として関東一円に信仰を集めています。これを題材にした『オオカミの護符』の自著の中で、小倉恵美子さんは、山を拝むこの自然への信心が山に詣でる行いの源泉とし、「山を拝むという素朴な行為は、社殿が作られる以前の、山そのものに対する古い信仰を思わせた。」と記している。山の自然を畏れ、敬いながら共生していた先人の自然への信心を呼び覚ます研修となつた。



委員長の開会挨拶に聞き入る参加者達
(御岳ビジターセンターにて)



御岳の自然について講演する柄澤氏



片柳氏の講演に聞き入る参加者、登奈利荘にて



御岳信仰について講演の片柳氏



登奈利荘玄関にて参加者全員で



綾広の滝にて